

# 岐阜分室便り 『2004河川環境メッセin岐阜』盛大に終わる

岐阜分室長 大竹 良昌



7月の15、16日に岐阜メモリアルセンターで、昨年に引き続き「2004河川環境メッセin岐阜」(以下「環境メッセ」という。)が「IT CITY MESSE in GIFU」と共同で開催されました。

環境メッセは、岐阜県が進める「自然の水辺復活プロジェクト」の取組の一つとして、自然共生型川づくりに関心を持って研究開発を進めている企業や学校、NPO、市民団体、行政、研究機関等が広く県民に取組の姿勢をアピールし、研究成果を発表する場です。今年は、今年のテーマを広げ、河川ばかりでなく、山林や道路、農地などに関する環境も加え、循環型社会を築くため産学民官が連携した「自然共生」に関する取組を紹介するものです。

テーマを『～人と自然の共生を支える技術展～』として、自然共生技術ゾーン(企業出展/ハード)、環境教育ゾーン(企業出展/ソフト)、行政・研究開発ゾーン、市民参加ゾーンの4つのゾーンと河川環境情報広場で構成され、82の産学民官などが出展をしました。我がリバーフロントもこのイベントを後援し、岐阜分室も行政・研究開発ゾーンで「自然再生への取組み」をパネル、模型(本年度製作)で紹介するとともに、会場内唯一の書籍の販売を行いました。

環境メッセへの入場者は、両日で約20,000余人となり昨年比1.3倍となり、出展者も昨年比に比べ展示物に模型など実体感のあるものを展示したり、子供のおもちゃ(竹とんぼ)のサービスや浴衣姿の女性など趣向を凝らし、大変盛大に開催されました。

それでは『出展参加に思う』と題し、模型づくりから出展について感想をまとめてみます。

## ◎模型づくりについて

飛行機、船、車くらいしか模型を作ったことしかない人間が集まったものですから、何をどのようにするのか、全くイメージが湧いてきませんでした。

そこで、近隣の河川を事例に「何があって」、「何が起きているのか」、自然再生を表現するとしたら「何があるのか」また、表現する内容が「地域に理解される内容となるのか」

など、分かりやすくするためには多少誇張することも必要として、製作の基本的なところの指導を独立行政法人土木研究所自然共生研



究センター長の萱場祐一氏にお願いしました。

模型はすべてが手作りで、製作期間も短かったため、手戻りがないよう主要な段階(製作者が決める)で確認を行いました。他の展示品はパーツを使用していたため手作り品の良さを見せることができたと思っています。

## ◎出展について

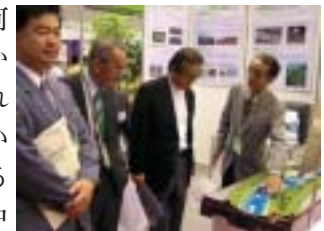
前日の午後から展示品の搬入・飾り付けが一斉に開始されました。分室も全員(全員でない間に合わない)で実施しましたが、少ない人数、予定の5時までしっかりかかってしまいました。誘導もされていなく前年度の経験がなかったらもっと時間がかかったものと想像できます。

さて本番、第一日目は開会式、テープカットなどの行事が行われることから砂川理事長代理の出席を仰ぎました。

人気のある展示企業は、模型や展示物に趣向を凝らしたところ、おみやげやクジで扇子などを贈呈しているところと見受けられました。我がブースは、県関係の人や模型に興味のある人が主で、模型の目的や表現内容について細かい説明(私が思っているだけかも)をしました。



二日目、梶原岐阜県知事が視察に見えることになり、立ち寄られた時、何をどう説明するか、分かって頂けるか、あれこれ心配をしながら待っていました。随行されている方が、河村理事、和田中部学院大学短期大学部副校長、小俣岐阜県河川課長であったことから知事に「リバフロです」と立ち寄りを促して頂きました。



## ◎感想

環境メッセの趣旨にあった新しい取組などの情報提供を多くの参加企業が取り組んでいます。我々もただ出展するのではなく、常に新情報の提供を心がけていく必要があります。また、展示の方法も来場者が魅力や興味を感じるよう配慮していきたいです。